様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：４３８０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２２８７

研究課題名（和文）親との離別（あいまいな喪失）を体験した保育園児のレジリエンスを育む支援法開発

研究課題名（英文）Development of support programs to nurture resilience of nursery school children who experienced separation from parents (ambiguous loss)

研究代表者
加藤　恵美（Kato, Emi）

静岡県立大学短期大学部・短期大学部・助教

研究者番号：５０３８１３１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　親と離別した幼児の支援の重要な担い手としての保育士がどのような対応をすべきかという問題意識に立ち、質問紙調査と保育指針の“あいまいな喪失” 理論(Boss, 1999/2005)による分析から、保育士は喪失体験支援が担えること、心理教育の枠組みによる体験型研修と担うべき専門性の範囲の検討、パンデミック下の保育での”あいまいな喪失”理論応用の必要性を明らかにした。国際オンラインシンポジウムを企画し「パンデミック下の子どもの現状と心理社会的支援：“あいまいな喪失”の視点から」で日本、イスラエル、シンガポール、アメリカの実践研究者が報告と心理社会的支援のあり方を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義の1つ目は、保育士は喪失体験児の援助を担える専門性を備えた専門職であることを明らかにしたこと、2つ目は現職への喪失体験支援に関する心理教育の枠組みを用いた体験型研修を実施したこと、3つ目は”あいまいな喪失”体験支援における保育士が担うべき専門性の範囲を検討したこと、4つ目はパンデミック下における保育分野での”あいまいな喪失”理論(Boss, 1999/2005) の応用の必要性を提示したことである。
社会的意義としては、国際シンポジウムによって、あいまいな喪失体験をした子どもへの心理社会的支援の必要性が国際的視点からも明らかになったことである。

研究成果の概要（英文）：Based on a questionnaire survey and an analysis of the "ambiguous loss" theory (Boss, 1999/2005) in the Child Care Guidelines, we found that child care workers can provide support for children who have been separated from their parents, that they can provide support for children who have experienced loss, and that they can provide experiential training within the framework of psychoeducation and the scope of their expertise. The study also clarified the necessity of applying the "ambiguous loss" theory to childcare during a pandemic. An international online symposium was organized to discuss the current situation of children during a pandemic and psychosocial support from the perspective of "ambiguous loss.

研究分野：社会福祉学

キーワード：あいまいな喪失　離婚　パンデミック　心理社会的支援　テキストマイニング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ひとり親家庭への社会保障分野の支援は講じられつつある一方、子ども自身への直接的支援は、極めて少ない現状である（李,2019）。支援の内容も経済的支援のみならず、心理的支援、特に子どもの心理的支えを図る支援の重要性が指摘されている（西山ら,2012）。支援策の一環として公立小中学校にソーシャルワーカーとカウンセラーの配置が進められているが、子どもを心理的に支えられる仕組みの更なる整備とともに、教師に対する研修の継続的実施の必要性が指摘されている（李,2019）。一方、子どもの福祉分野においては、保育士養成課程内容は、子どもと家族を取り巻く社会問題の複雑化・多様化に対応すべく、その専門性の高度化を図るため新科目を創設するなど大きく変化している。①本研究は、支援の必要性が十分認識されてこなかった子どもの喪失・トラウマ体験に焦点を当てた研究であり、保育士が行う新たな保育の領域として、これまで取り上げてこられなかった「親と離別した幼児の喪失・トラウマ体験への支援」の方策を開発しようとするところに特色がある。②親と離別した幼児の喪失・トラウマ体験への支援の必要性を明確化することにより、保育士による子どものレジリエンスを高める「予防的・発達的な視点」の取り組みであることが特色である。

２．研究の目的

本研究は、＜親と離別した幼児＞に対する支援の重要な担い手としての保育士が保育現場でどのような対応をすべきか、という問題意識に立つ。今日、親が離婚した未成年の子どもは約 22 万人（厚労省,2018）に上るが、多職種連携による包括的な支援はほとんどなされていない。申請者は、保育士を対象とした 2017-2019 年度の基盤研究において、（1）離婚の背景には複雑な心理社会的要因が絡む「個別性」の高さと、（2）その個別性に応じた発達的支援を行うには、保育士の専門的知識・スキルの獲得が不可欠であることを明らかにした。

そこで本研究の目的は、

①保育士養成課程の新領域「子どもの喪失体験によるトラウマへの支援」の提案

保育士は、子どもが新たな能力や人間関係を「獲得」することへの支援とともに、子どもの「喪失」体験によるトラウマ体験への支援という新たな保育の領域を担う必要性を明らかにする。

②子どもの喪失体験を包括的に捉える「あいまいな喪失」（Boss,1999）理論に準拠

申請者が行った保育現場の実態調査（加藤ら,2018,2019）において、親を失う要因は「離婚」が最も多かった。20 歳未満人口における親が離婚した未成年の子の比率は増加している（野口,2013）。「離婚」は、身体的には不在であるが心理的に存在していると認知されるタイプの“あいまいな喪失”である。親だけでなく子どもも同様の喪失体験となり得る（平木,2012）。よって、喪失要因を死別など「明確な喪失」に限定せず、「離別」という「あいまいな喪失」を含めて包括的に捉える。

③子どもがもつレジリエンス（Bonanno,2001）にフォーカスした予防的視点による支援法の開発

喪失体験児のトラウマ体験への支援法の開発において、子どもがもつレジリエンスに着目する。レジリエンスは、危機後の回復の一部ではなく（Boss,2002）、むしろ再生していく成長や肯定的な感情を伴った連続性のある健康の機能である（Bonanno,2001）。特に、子どもにとって親との「離別」という「あいまいな喪失」は、終結の見えないトラウマ的なストレスであるため、レジリエンスを高めることが重要である。子どものレジリエンスの保護資源は、自己効力感、自尊心、感情表現、肯定的自己感などで、これらを促進する支援法を開発する。

３．研究の方法

本研究の目的と方法は、親と離別した保育園児への保育士の個別的支援の実態を明らかにする【研究 1：質問紙調査】、および（2）離別（あいまいな喪失）に伴う喪失体験児のレジリエンスを高めるための専門的知識・スキルを学ぶ保育士向け体験型研修の開発である【研究 2：実践研究】。これは、「子どもの発達保障」を担う「保育」で取り組むべき重要かつ喫緊の課題であると考える。

【研究 1】保育所保育士（以下：保育士）対象の親と離別した幼児（以下：喪失体験児）の実態と保育士の支援の実態に関する質問紙調査

【研究 2】

①　保育士対象の喪失体験児のトラウマ体験への「予防的・発達的」視点に立った「グループ表現セラピー」を用いた体験型研修の開発と実施

②保育士を対象とした保育現場における喪失体験児のトラウマ体験への「予防的・発達的」視点に立った研修パッケージ開発とまとめ

４．研究成果

親と離別した幼児の支援の重要な担い手としての保育士がどのような対応をすべきかという問題意識に立ち、質問紙調査と保育指針の“あいまいな喪失”理論(Boss, 1999/2005)による分

析から、保育士は喪失体験支援が担えること、心理教育の枠組みによる体験型研修と担うべき専門性の範囲の検討、パンデミック下の保育での”あいまいな喪失”理論応用の必要性を明らかにした。国際オンラインシンポジウムを企画し「パンデミック下の子どもの現状と心理社会的支援：“あいまいな喪失”の視点から」で日本、イスラエル、シンガポール、アメリカの実践研究者が報告と心理社会的支援のあり方を検討した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 加藤恵美・いとうたけひこ・井上孝代	４．巻 14
２．論文標題 親との離別という”あいまいな喪失”体験をした保育園児へのパンデミック下の心理社会的支援の課題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 マクロ・カウンセリング研究	６．最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加藤恵美・いとうたけひこ・井上孝代	４．巻 35-W
２．論文標題 親の離婚を体験した子どもの支援に関する保育士の意識調査：現職・保育学生を対象とする“あいまいな喪失”体験児への支援教育プログラム構築に向けて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 静岡県立大学短期大学部研究紀要	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

加藤 恵美 (Emi Kato) - researchmap
https://researchmap.jp/emikato2019
井上 孝代 (Takayo Inoue) - researchmap
https://researchmap.jp/takayoinoue
いとう たけひこ (Takehiko Ito) - researchmap
https://researchmap.jp/itotakehikowako

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井上　孝代 (Inoue Takayo) (30242225)	明治学院大学・国際平和研究所・名誉教授 (32683)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	伊藤　武彦 (Ito Takehiko) (60176344)	和光大学・現代人間学部・教授 (32688)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岡本　悠 (Okamoto Hisashi)		
研究協力者	日高　共子 (Hidaka Kyoko)		
研究協力者	布施　利穂 (Fuse Riho)		
研究協力者	片岡　真紀 (Kataoka Maki)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
パンデミック下の子どもの現状と心理社会的支援～”あいまいな喪失”の視点から～	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関